HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	藤田, 正一
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 10
Issue Date	2005-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59483
Type	book
File Information	hakubutsukan10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10 号

ISSN 1345-059X

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学総合博物館ニュース

特集「北大総合博物館への期待 II」

大学教育のかなめとしての総合博物館



博物館のファンを自認している。率直に言えば，博物館の無い大学は大学とは言えないとさえ思っている。なぜそう思うようになったかを知ってもらうために、ごく個人的な経験から説明させていただきたい。

大平原のオアシス―大学と博物館

今から30年も前に、博士研究員として1年8ヶ月滞在したアメリカでの話である。夏休みを利用して，フォードのマーベリックという完成度の低いコンパクトカーの屋根の上にテントを積み，妻と当時3才になる娘と一緒にアメリカ大陸横断の旅に出かけた。デトロイトを出発してカナダを通ってシアトルまで行き，アメリカの北回りの街道を通って戻ってきた。帰国のときも西海岸まで南回りの旅をしたので，合計三回，北米大陸を車とテントで横断したことになる。

西部の大平原を何時間も何日も走って町に着くと，きまって地域の博物館や大学博物館（ユニバーシティー・ミュージアム）に足を運んだ。広くて，安全で、安いというか，ほとんどがタダだった。どの博物館も、本当の意味で豊かであった。写真にあるカナダ・エドモントン市のアルバータ州立博物館のように建物自体が豪華なこともあったが、そうでなくても内装などの趣味が良く、気持ちがよかった。そこでは、それぞれの土地の文化財だけではなく、どういうわけか古代メソポタミア、エジプト、ギリシャ、ローマなどの遺跡の出土品が陳列されていた。北米の中小都市において、大学と博物館はその土地の文化を象徴する誇りであり、大学博物館は大学の誇りであった。おそらく、今でもそうだろう。

私が、北米でしらみつぶしに博物館を訪ねたことについては、旅先で休憩所として使いたいという目的のほかに、もう一つ動機があった。アメリカに留学する前に、たまたまシオドア・クローバーの「イシ―北米最後の野生インディアン」（行方昭夫訳、岩波書店）という本を読んでいたからである。この本は、今では人類学の分野で古典になっているのではないかと想像する。後に、カリフォルニア大学バークリー校の複数の知り合いに聞いたところ、全員、この本のタイトルと内容を知っていた。

最後のヤヒ族―イシの生涯

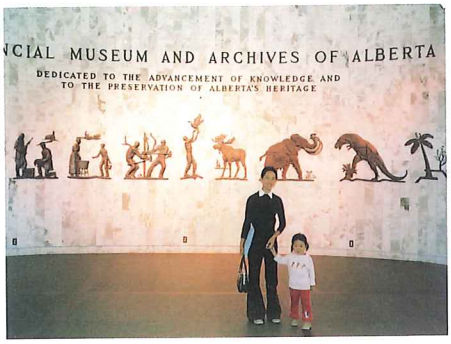
話のあらましはこうである。1911年8月に、サクラメント川流域のオロヴィルという町の郊外で一人の「野生」のネイティブ・アメリカンが発見された。古い幌馬車の布の切れはしを肩にかけているほかは何も身につけておらず、やせこけて飢え死にしかけていた。この男は、部族の習慣で最後まで自分の名前をあかさなかったが、当時すでに絶滅したと思われていたカリフォルニア北部山岳地帯に住んでいたヤヒ族の最後の一人であることが確認され、彼らの言葉でヒトを意味する「イシ」と名づけられた。イシは、文字通り「生き残り」であった。ゴールドラッシュでカリフォルニアにやってきた白人たちは、1860年代から70年代の初めまで、つまり日本でいえば札幌農学校ができる直前まで、現代人が

（次ページにつづく）

目　次

ページ1：	大学教育のかなめとしての総合博物館（小笠原正明）
ページ3：	総合博物館の新たな活動に向けて（菊池俊彦）
ページ4：	地域社会との連携を期待して（野川晃一）
ページ6：	第11回企画展示「新着コレクション展　化石鉱物コレクション」（箕浦名知男） 第12回企画展示「ストックホルム水賞と北海道大学水研究の系譜」（渡辺義公）
ページ7：	第13回企画展示「北海道の歴史的建築図面展」（池上重康）
ページ8：	第14回企画展示「恵迪寮資料展―恵迪魂の根源を追う―」（高井宗宏） 第15回緊急企画展示「台風18号の爪痕―北大札幌キャンパス―」（藤田正一） 第9回国際シンポジウム「アジア大陸の成長と変形」（箕浦名知男） 客員教授紹介（松枝大治）
ページ9：	北緯43度、南緯43度（David H. Green）
ページ11：	平成16年4月から平成16年9月までにおこなった各種セミナー
ページ12：	平成16年4月から平成16年9月までの主な出来事／お知らせ・お礼

Jan. 2005
ISSUE 10
北海道大学総合博物館　　2005年1月発行



家族と訪れたカナダ・エドモントン市のアルバータ州立博物館の正面ロビー（1975年8月）

クマを退治するように、あるいはそれ以上の無慈悲さをもって、ネイティブ・アメリカンを山の奥深くまで追いつめ、撃ち殺していた。

イシは、当時としては奇跡的に、彼の価値と人間的な資質を理解できる高い知性を備えたカリフォルニア大学の２人の文化人類学者、トーマス・ウオーターマンとアルフレッド・クローバーに保護された。イシは新しい友人たちと知り合い、博物館の中で生活し、そこで仕事をしながら残り５年の人生をまっとうした。最後は進行性結核に感染し、「調子の良い日も悪い日も、忍耐強く、不平を言わず、周囲のことに愛情ある興味を寄せ」ながら息を引き取った。年齢は不詳だが、55才前後と推定されている。

この本には、いろいろな意味で感銘を受けた。特に文化人類学の学問的な特徴が具体的に示されているところが面白かった。

一つは、その実証性である。カリフォルニアのネイティブ・アメリカンは５つの五大語族に分かれており、それが21の言語に分かれ、さらに130の方言に細分化されている。クローバーがフィールド・ワークで採集したその地域の方言語のリストを駆使して、しんぼう強くイシがその中のどの言葉を話す人であるかを判定するくだりは、スリルと臨場感に満ちている。

二つは、その行動性である。ウオーターマンとクローバー、それに新しく「親友の輪」に加わったサクストン・ポープ医師の３人は、博物館の中でイシと時を過ごして観察するだけでなく、イシの故地ヤヒに旅行して、一緒に行動し、食事をし、泳ぎ、狩りをして戸外で寝た。イシは、「これらの原始生活に慣れぬ仲間たちを注意深く世話してやったに違いない」という。

三つは、その包括性である。三人の友人とこの本の著者のクローバー夫人は、イシの言語や精神や肉体や技術を、個別の要素としてとらえようとはしなかった。イシが生まれて育った文化的背景に深甚の敬意をはらいながら、彼を統合された一つのシステムとして理解しようとした。人間の理解のためには、これ以外の方法はない。著者は、ポープ医師の次のような文を巻末に掲げて、イシを追悼している。

そのようにして、我慢づよく何も恐れずに、アメリカ最後の野生インディアンはこの世を去った。彼は歴史の一章を閉じる。彼は文明人を知恵の進んだ子供―頭はいいが賢くはない者と見ていた。われわれは多くのことを知ったが、その中の多くは偽りであった。イシは常に真実である自然を知っていた。彼の性格は永遠に続くものであった。親切で、勇気があり、自制心も強かった。そして彼はすべてを奪われたのにも拘わらず、その心にうらみはなかった。彼の魂は子供のそれであり、彼の精神は哲学者のそれであった。

大学博物館が果たした役割

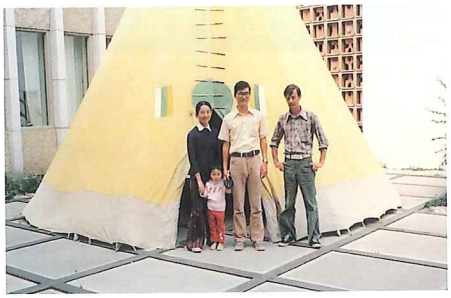
1910年代のカリフォルニアで、このように貴重な「人類の財産」が保全されたことについては、創設されたばかりの大学博物館の果たした役割が大きかった。惜しみなく私財を投入して大学を援助し、大学の評議員にもなっていたフィービ・ハーストは、博物館は「大いなる教育者」として「多くの人々に知識をひろげる」べきだと考えていた。そのため、州内で言語学および民族学のフィールド・ワークを行っている若い人類学者を寄付金で雇い、遺物や標本の蒐集を行い、自前で専用の建物を建てさえした。現在、フィービ・A・ハースト人類学博物館はバークリーの構内にあるが、イシが保護された当時は、サンフランシスコの一角に本格的な建物を手に入れて、ちょうど一般公開にこぎつけようとしていたときだった。

イシは、３人の親友に見守られながら、ときには午後のみで千人を超える参観者の前で道具や武器を作ったり、火起こし棒で火を起こしてみせたりした。イシがこのように人々の前で仕事をすることを厭がらなかったのは、博物館が自分の家であり、仕事を見せることが人々に役立っていると感じたからだという。このようにして北米最後の新石器時代人は、数千年の時をこえて、人々に自分たちはこの世の工人であり、道具の作り手であることを自覚させ、またその仕事ぶりが美しく完成されたものであることを実証した。博物館は遺物の収集・展示の場所としてだけではなくて、生きている文化の発信地になった。

博物館のこのような機能は、大学における教育のためにきわめて重要である。大学は、それぞれの学問分野のエートス（精神）を若い世代に伝える責任があり、そして大学の教育は、専門の如何を問わず、上に述べたように実証的であり、行動的であり、包括的でなければならないと思う。大学における研究はこのような教育を前提として、はじめて正統性と存在意義を主張できる。大学の諸分野は「大いなる教育者」である大学博物館と連携して、学生のみならず多くの人々の興味と関心を背景に、それぞれの分野の発展をはかるべきだと思う。

見て、触って、感じて理解する「人間」と「科学」

私は、1960年代から本学の理学部で学び、工学部で働いた経験があるので、かつてそれぞれの建物の中に何があったかを部分的にではあるが知っている。その中には、科学や技術の啓蒙主義時代の流れを受け継いだ貴重な測定器具や資料があった。器具は、金属製であったり、木製であったり、金属と木の組み合わせだったりしたが、いずれも繊細かつ重厚で、手の込んだ



アルバータ州立博物館の中庭に建てられた先住民族のテントの前で（1975年8月）

美しいものであった。しかし、その大部分が、その後の建て替えのときに無造作に捨てられてしまったことも知っている。さらに、山下生化学研究所というレンガづくりの頑丈で美しい建物が、「面積合わせ」のために丸ごと破壊されたことも知っている。これは野蛮な行為ではないだろうか？科学や技術の教育においては、その革新性・革命性とともに、歴史的な連続性の理解が重要である。学問の連続性や継続性は言葉としてだけではなく、見て、触って、感じて、理解すべきものである。私の見聞した範囲では、アメリカ、イングランド、スコットランド、北欧などの大学では、この点に関する配慮が行き届いていた。真に創造的な科学技術の担い手に育てるために、このような教育が必須であることを良く理解していると思う。過ぎたことは仕方がないとして、今後、貴重な文化財をそれぞれの専門部局が維持・管理できないのであれば、大学博物館の中にそれぞれが拠点を設けて、必要に応じて教育に利用するというシステムを作る必要がある。

私自身、総合博物館ではないが、北方資料室を授業のために活用させてもらった経

験がある。「変革期の大学」という短期留学生プログラム（HUSTEP）および一般教育演習を開講していたときに、15回の授業のうち必ず１回は中央図書館５階の北方資料室が保管している札幌農学校および北方地域に関するコレクションの見学にあて、その直後に付近の会議室を借りて学生たちに討論させた。本物を見たことの効果は大きく、討論の質と量が明らかに違っていた。それぞれの授業科目の一部に、このように博物館と連携した教程を組むことはできないだろうか。博物館内に、このような授業を可能にする教室またはセミナー室と、できれば学生が作業ができるラボを作れないだろうか。

大学の各部局や専門分野は、総合博物館や北方資料室またはアーカイブの保存のための施設とリンクしてネットワークを形成し、教育の中に自然な形でこれらの機能を組み込む必要がある。総合博物館は、大学の学生・教員・職員のみならず、一般の市民も本物に接し、広い視野で学問の本質を理解し、文化財に敬意を払う態度と習慣を身につける場所となろう。そのような近未来を考えれば、「博物館を持たない大学は大学とは言えない」だけではなく、博物館こそが大学において諸分野を束ねるかなめの存在であり、地域に対する大学の文化の発信源であることが納得できるだろう。

小笠原 正明
（高等教育機能開発総合センター教授／
科学・技術教育論）

総合博物館の新たな活動に向けて



はじめに

総合博物館が開設されて６年になる。入館者は15万人に達しようとしている。慶賀の至りである。これほどの入館者が訪れるとは予想もしていなかった、と言ってよいだろう。特に学外の市民の入館が多いことは、他大学の博物館に見られぬ特徴であり、北大が市民に愛されていることの証明として悦び、また誇りにしてよいだろう。

もちろん、それは観光客がポプラ並木とクラーク先生の銅像を訪れながら、キャンパスを散策するという、他大学ではおよそ考えられない現象のお蔭でもある。総合博物館のホームページを開いて、交通案内の地図をクリックすると、「博物館はクラーク像とポプラ並木の中間にあります」と書かれている。うまい宣伝だな、と感心する。

でも、せっかく博物館のホームページを開いてくれた学外者を、もっと惹き付けるためにはトップページに館内の様子、展示風景、来館者が楽しそうに見学している情景、これぞ北大の総合博物館ならではの所蔵品などの写真を掲載して、「行ってみようかな」と思わせる工夫が必要だろう。併せて、入館者の見学の便宜のために、一枚のリーフレット程度の博物館案内だけでなく、有料でよいだろうから、せめてＡ４判20ページくらいの博物館ガイドブックを発行することが必要だろう。そのようなガイドブックを通して、入館者が友人に博物館の魅力を宣伝してくれるかも知れない。

そのような努力は学内の学生・教員・事務員の入館者を増やすためにも必要である。学内にいながら、総合博物館に足を踏み入れたことのない人たちが、まだまだたくさんいるという現実をもっと直視しなければならない。特に学生が４年間の在学中に、博物館に一度も入ったこともないまま卒業するようなことがあっては博物館の恥である、と博物館の職員は思わなければいけない。

博物館の建物

博物館はキャンパスの中央道路に面しており、中央口ーンに近く、またエルムの林と芝生の絶好の環境に取り囲まれた位置にある。なんと恵まれていることだろう。しかも旧理学部の校舎は薄茶色の豪奢な建物で、いかにも博物館らしく、とりわけ正面玄関の意匠は趣きがあってすばらしい。東京大学の総合研究博物館は赤門から入って、どこにあるのか、探すのに苦労する。建物は何の特徴もないから、近くまで行っても、それが博物館だとは気付かないほどである。かつての総合資料館のときのほうが、ずっと親しみ易い建物だった。

京都大学の総合博物館は立地条件が抜群に優れている。現代建築に流行のコンクリート剥き出しの建物は私には違和感があるが、なにしろ、百万遍の交差点のすぐ近く、東大路通りに面しているから、入りやすい。すでに何度か訪れているが、いつも閑散としている。それは私にとって静かでゆっくりできて、うれしい。重要文化財指定の日本史関係の文書が展示されているのは京都という土地ならではの故であるが、それにとどまらず、興趣に満ちた資料で溢れている。とても一時間くらいでは見終わらないから、また来ようと思う。疲れたら、ミュージアムショップでコーヒー（それが自動販売機であっても）を飲み、赤い日傘の下で一服しながら、そこの売店で買った本を開くのは至福のひと時である。国立京都博物館や、青銅器の展示で著名な泉屋博古館のような堅苦しい雰囲気はなく、くつろぎの場所でさえある。それにしても、これだけの魅力ある博物館なのに、それほど入館者がなく、それが悩みだというのは京都ならではの大学博物館の宿命だろうか。

博物館の展示品

40年前、学生時代に考古学資料を見学に京都大学文学部の陳列館を訪ねたことがある。こじんまりした部屋だったが、展示されている資料は超一級品ばかりだった。この陳列館がその後、博物館になり、今日の総合博物館に発展した。陳列館が開設されたのは1914年だというから、もう90年になる。大学の博物館にふさわしい見応えのある収集品は一朝一夕に集められたのではなく、長い歳月にわたる結果だった。

もっとも、その点では北大でも引けを取らないだろう。北海道の幕末・明治初期の膨大な文書や地図が附属図書館の北方資料室に収蔵されている。サハリンや千島の文献、シベリアや中国東北部（旧満洲）の文献は北大ならではの収集である。北方資料室の前身である北方文化研究室は、戦前に学内措置で設置された全学の研究機関で、農学部・理学部・医学部などの錚々たる研究者たちの集まりだった。その業績は『北方文化研究報告』全20冊（1939～1965年）に発表されている。この報告は世に名高いものの、大学の出版物で入手困難なことから、1987年に思文閣出版（京都）から復刻版が刊行されたほどである。

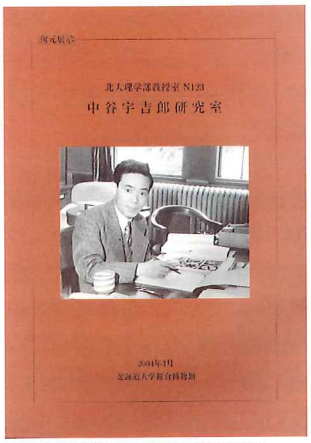
北方資料室は知る人ぞ知る北方関係の資料の宝庫であるが、附属図書館の４階奥深くにあるため、学内でもあまり知られておらず、他方、学外者の利用率は著しく高いのが特徴である。その入口には江戸時代の貴重な北方地図が常設されているが、ここだけに展示して置くのは惜しい。このような古地図、また北大が誇るこれらの北方関係資料と貴重な文書、皮革装丁の洋書を是非、総合博物館の企画展示で披露して、全学の人たち、学生、および学外の市民に見ていただきたい、と思う。

また同様に、北大が誇る低温科学研究所の雪氷学やシベリアの永久凍土の研究、旧流氷科学研究施設の流氷の研究の業績を総合博物館の企画展示で見せていただけると、大きな反響をよぶことだろう。

2003年秋に公開された中谷宇吉郎先生の研究室と、その記念講演、およびカタログ『復元 中谷宇吉郎研究室』の刊行（2004年3月）は好企画であった。京都大学の総合博物館の2003年秋の企画展で開催された『今西錦司の世界』はたっぷり見応えのある緻密なシナリオの展示だった。こうした卓越した研究者列像の企画展示の開催を総合博物館に期待したい。動物学の犬飼哲夫先生とか、植物学の館脇操先生の御研究を一堂に集めて見せていただくことができたら、学生や市民の反応は大きいだろう。

教育と出版

総合博物館の教員は教育を担当して、全学教育の複合科目と一般教育演習に4コマの講義を開講、博物館の魅力を一年生に伝えている努力は高く評価されよう。国立民族学博物館と国立歴史民俗博物館ではすでに大学院生を受け入れて、また総合研究大学院大学を通して博士学位の授与機関になっている。総合博物館でも、大学院生を受け入れて博士学位を授与する機関になることが、いずれ求められるだろう。博物館の第一の使命は展示にある。国立民族学博物館の研究者たちは、創設当初から10年あまりは世界各国に飛び廻って民族学資料の収集、買い付けに明



カタログ『復元 中谷宇吉郎研究室』

け暮れていた。ついで資料が集まると、今度は企画展示に追われていた。次は後継者の養成だったから、大学院生の受け入れは必然だったろう。その点において、総合博物館の場合、資料はすでに膨大にある。院生予備軍はキャンパスにいる。問題は総合博物館に、彼らを如何に惹き付けて、総合博物館でも大学院教育を受けることができることを知らしめるか、である。総合博物館が担うべき教育のあり方を検討して欲しい。

また北大には北大図書刊行会がある。図書刊行会と提携して総合博物館の出版物を刊行することを是非、検討して欲しい。東京大学の総合研究博物館の2002年春の特別展で開催されたオホーツク文化の展示に合わせて、博物館が発行した出版物『北の異界』は東京大学出版会から別途、刊行され、予想外の売れ行きで完売となった。

総合博物館でも、今後の企画展では単なるカタログではなく、「売れる」本作りの案を練って、図書刊行会と提携して出版物の刊行を目指して欲しい。海外の博物館では企画展、あるいは特別展のカタログでありながら、内容は堂々たる専門書、しかしそれは写真と図版を多用し、記述が平易で市民にも好評を博す出版物を発行している。こうした出版物の発行は、ひいては博物館の魅力につながる。

おわりに

総合博物館が開設された1999年に、まだ博物館の展示面積は極めて限られていた。旧理学部の校舎を受け継いで、これを改修して、博物館にふさわしい展示室が次々と作られるはずだった。だが、2004年からの大学の独立行政法人化に伴って、建物改修の予算の見通しは暗然としている。

そもそも大学博物館は、その大学の顔である。総長は学外、特に外国から客人を迎えたら、まず博物館に案内して我が大学の概観を説明し、館員が展示品を説明すれば、客人はこの大学がどのような研究において秀でており、どんな特徴のある大学か、すぐに理解するだろう。総合博物館は、そうあらねばならない。総長にそのように要望したい。

総合博物館の新たな活動に向けて、館員の奮起を期待すると共に、開館10周年記念特別展の企画を、今からじっくり練り上げていって欲しい。

菊池俊彦
（文学研究科教授／東洋史）

地域社会との連携を期待して



昨年4月に、国立大学法人化に伴い本学の学外理事（常勤）に就任した。その後、半年余りの間に、個人的に或いは要人の視察に随行し、何回となく北大総合博物館（以下、博物館という。）を訪れた。その際に考えたこと、そして、9月に博物館運営委員会オブザーバーを拝命したこともあり、事務の方に入館者の数や自由意見を聞き、視察をお願いした私の友人等の意見も踏まえ、いわば、博物館の内部と外部の中間あたりに軸足をおく関係者として取り纏めたのが本稿である。

入館者数の推移

博物館は1998年11月24日に学術資料展示第1期地球惑星科学分野(3F)が先行公開、1999年4月1日に正式オープンした。先行公開して以来、入館者数は2002年8月に5万人を達成、2003年11月に10万人を達成し、本年度末には15万人を達成する見込みである。年度別に見ると、以下に示すとおりである。

1998(平成10)年度	3,043人
…11月24日から集計	
1999(平成11)年度	9,733人
2000(平成12)年度	8,789人
2001(平成13)年度	15,866人
2002(平成14)年度	28,952人
2003(平成15)年度	42,431人
2004(平成16)年度	33,217人
…10月31日まで集計	

この数字が多いのか、少ないのか。例えば、博物館が本学より以前に新設された東京大学（1996年）、京都大学（1997年）、東北大学（1998年）の2003年度の入館者数は、東京大学総合研究博物館16,708人、京都大学総合博物館19,717人、東北大学総合学術博物館9,218人であった。このように本学博物館の入館者数は圧倒的に多い。また、オンシーズン（5月～10月）とオフシーズン（4月、11月～3月）に分けて整理すると、オンシーズン約7割、オフシーズン約3割と北海道の季節性を反映した特徴が見られる。

一般入館者の感想

博物館にノートを置き、感想を取り始めたのが昨年5月からで、10月15日現在、約180の感想文が記されていた。本学への

訪問客、観光客、修学旅行生、総合学習の生徒が中心である。それらの主な感想は、「博物館の外観も素晴らしいし、展示内容もよい。楽しい。感動した。時間がたりなかった、面白かったので、また来たい。歴史の深さ、長さ、大切さ、未来の希望、ここへ来て色々な事を想います。北海道の開拓精神のコンセプトを北大の歴史の中から感じ取ることができました。(ポプラ並木などを回ってきたこともあるのか)疲れた。もう、くたくた・・・。駅から近くて、自然豊かで素晴らしい環境です。」というものであった。

友人等4氏のコメント

札幌在住の4名の方―A氏(雑誌出版の経営、編集)、H氏(女子短大教授)、S氏(建築設計会社経営)、Nさん(街づくり会社役員)―に、あらためて博物館を見てもらった。A氏、Nさんは本学に一般公開している博物館が存在していることも知らなかった。ハード、ソフトの両面から頂いた4氏のコメントは、次のとおりである。

【ハード面】

1．不案内の外部来訪者に対する誘導サイン(外部来訪から内部展示室まで)が不親切できわめて分かりにくい。「博物館はこの入口を入って、階段をのぼらず、まっすぐも行かず、左に曲がってください。」という姿勢をもった入口導入サイン(エントランス)の工夫をすべきである。また、内部展示の充実ぶりと内容の深さに比べ、このエントランスホールは理学部のエントランスになっており、来訪者の博物館への期待と関心は急速に薄れる。

2．入口のライトが暗い。最初の暗さが尾を引くし、カビくさい感じにつながる。

3．休憩用の自由に座れる椅子(ベンチ)を、より多く設置することが望ましい。また、将来的には、学内にある本学ゆかりの美術品(絵画や書など)を展示した休憩用の部屋やコーナーを設置することも考えられる。そこで、コーヒーを出してもよい。

4．守衛室を開放するなどして、ミュージアムショップを設置する。そこで博物館のグッズ(本学や博物館の絵はがき、ポプラ木工品などの記念品)を販売する。

【ソフト面】

1．地域に親しまれる大学として、小学生・中学生にも理解できるパンフレット(イラストや漫画を多用したカラーの楽しいもの)を作成して、各学校に配布する。総合学習の取り組みを支援することにつながる。

2．道内の小学校・中学校の修学旅行に組み入れられるように、旅行代理店との連携を図っていく。そして、食育の点から大学生協と協力して昼食の提供を工夫する。



企画展示を見学する来館者

3．時計台や開拓記念館等の外部とのネットワークを構築し、更に内部組織(植物園、函館・水産科学研究科水産資料館を含む。)との連携を充実していく。
また、本学出身者など個別テーマに焦点をあてたネットワーク、例えば、新渡戸稲造ゆかりの地のネットワークなども考えられる。

4．将来的に、常設展示が更に充実され、博物館が理学部から独立した建物構造になった暁には、少額でもいいので入館料を徴収し、博物館の維持投資とする。
[参考]本学植物園　個人；大人400円、小人280円、団体；大人330円、小人220円
15年度入園者数(4/29～11/3)73,471人

5．大きな課題として博物館の存在が知られていない。それを知らしめることが重要である。

今後なすべきこと

本学には、札幌農学校の開校1876年(明治9年)以来現在まで、128年にわたる研究の成果として、400万点を越す貴重な学術標本を所蔵しているが、その中には約1万1千点のタイプ(模式)標本が含まれる。数年前、本学出身の経済人から「北方の夢」(豊田有恒著)という本を頂いた。これは、近代日本を先駆した風雲児ブラキストン伝であるが、このブラキストンが津軽海峡に動物地理上の分布境界線(ブラキストン線)を提唱するに至った。本州や北海道で彼自身が採集した255種、約1千3百点の鳥類標本もあると言う(植物園で管理)。また、子供たちに人気のある約9千万年前(白亜紀後期)の大型恐竜「ニッポノサウルス・サハリネンシス(日本竜)」の化石(博物館3Fで展示)及び明治時代から現在まで北極から南極に至る世界中の海域や淡水域から採集された膨大な魚類標本のコレクション(函館の水産資料館で一部展示)も代表的なものとして所蔵されている。

＊

前述した4氏のコメントも踏まえると、法人化した本学の博物館が目指す方向としては、地域社会との連携が大変重要になる。本学の平成16年度計画において、「市民に開かれた博物館として、・・・・・地域社会への教育普及に寄与する。」と明記されている如くである。

そのために実行することとして、次の3点を強調しておきたい。

(1)まず、博物館の存在を知ってもらい、来てもらうこと

静かで広くて緑の中にある博物館、品性や品格のある博物館、楽しく過ごせる博物館など、本学の博物館には人を引き付ける魅力があるようである。しかし、100%道産子の人、本学卒業生でさえ、その存在を知らない人が如何に多いことか。博物館の紹介や行事スケジュールを、自治体やNPOなど色々な機関の広報誌に載せてもらう、或いは掲示してもらう、配布してもらうことも考えられる。

とにかく一度、博物館に来てもらうことである。ビギナーの訪れる人を増加させ(これがリピーターにつながる)、これらの人々の口コミでそのすばらしさを伝えてもらう。その努力が必要である。

(2)次に、ネットワークを構築し、多様な交流の拠点とすること

8年ほど前、江戸東京博物館ホールで、私が卒業した高校の先輩・中川寿夫氏が脚色・演出した劇団の公演を見た。「北越雪譜―天からの手紙―」であった。そこで頂いたパンフレットに載っていたが、中川氏の友人・榎本滋民氏(劇作・演出家)が、ある自治体から地域活性化の提言を求められて―「自立することイクラのごとく連帯することスジコのごとく」と答えたとのこと。つまり、「地域も、平常では、球体という完結形体をなすイクラのように、明確な個性をもって自立しつつ、必要な際には、緊密な一腹をなすスジコのように、弾力ある協調性をもって連帯することが望ましい。」ということであり、納得したことを覚えている。地域間のネットワークの大切さを述べつつ、現実には地域の自立と連帯などそう楽々と併存するものではないことも言われていた。

難しい面もあるが、現代は「連携とネットワークの時代」である。例えば、産、官、学、市民の「横の協力」或いはビジネス、会議、観光、修学旅行、総合学習などで訪れる人、そこで働き学ぶ人などを含めた広範囲の交流などができないものか。博物館

がその交流の拠点とならないものかと考える。そのためには、専門職としてコーディネーターやファシリィテーターを本学として養成することも検討課題の一つになろう。

（3）そして、次の世代のために感動を与えられる博物館であること

小学４年生の感想「今日博物館に来てとても楽しかったし、すごくためになりました。すごくきちょうな物（アンモナイトやきょうりゅうや石など）が見れました。よかったです。また来たいです。」。8歳（女の子）の感想「きょうははくぶつかんにきてとってもうれしかった。はくぶつかんにはきょうりゅうのかせきがたくさんあったから、すごいな～とおもいました。いっかいもきたことがないのでびっくりしました。またきてみたいな～。」。

博物館には、子供たちが感動するものがあり、今後の企画展示如何によっては、科学離れと言われる今日、科学が好きになるきっかけにもなりうるのではないか。そのためには、既述したソフト面のコメント及び（1）（2）の提言にも関連することであるが、小学校へのＰＲ活動を充実強化することが求められる。

最後に、前記Ａ氏は言う。

『本道には「自然」「科学」「歴史」「文化」を一同に集めた総合博物館はない。もしつくるなら「数」よりも「深さ」を見せる展示になるだろう。その中に「開拓精神」と「未来志向」のふたつの想いをこめてほしいと思う。本道で「世紀の大発明品」や「雅な鮮やかさ」、「万国より来る歴史的図版」を蒐集するのは無理だろう。しかし、北方圏を代表する文化都市として、住む人に、そして観光客に十分な満足を与える博物館をつくることはできるはずだ。』。

本学の豊富な持てる素材を博物館において顕在化するならば、その可能性が十分あることは言うまでもない。

野川晃一
（理事／地域連携担当）

第11回企画展示「新着コレクション展 化石鉱物コレクション」

名古屋市在住の塚本勝彦氏による化石鉱物コレクションが総合博物館に寄贈されたのを受けて、第11回企画展示「新着コレクション展　化石鉱物コレクション」が、３階企画展示室において平成16年5月18日から6月20日の期間で開催されました。

昭和30年代から50年代にかけて中部地方を中心に全国で収集された貴重な植物化石や動物・貝類化石、鉱物・鉱石からなるコレクションは学術的に大変貴重であり、北大における古生物学・鉱物学的研究に大きな貢献をするものです。

今回は寄贈標本約2500点のうちからごく一部を厳選して一般公開しました。

またこれらのコレクションは現在、整理・データベース化をおこなっているところであります。

これらの貴重な標本類を寄贈いただいた塚本氏にあらためてお礼申し上げます。また展示準備でご協力頂いたボランティア諸氏に感謝いたします。

箕浦名知男
（研究部助教授／古生物学）

第12回企画展示「ストックホルム水賞と北海道大学水研究の系譜」

21世紀は水の世紀とも言われています。水は人間の生存に欠かすことができませんが、現在世界では約11億人が安全な水を飲めずにおり、安全で安価な水を供給されている日本においても、渇水、水源の枯渇や汚染など様々な水の問題を抱えています。北海道大学総合博物館では、平成16年５月25日～７月４日の期間に開催した企画展示「ストックホルム水賞と北海道大学水研究の系譜」において、水に対する理解と関心を深め先駆的活動を支援することを目的として設立されたストックホルム水賞の二人の日本人受賞者と、その二人を産み出し現在まで続く北海道大学における「水」の研究の系譜をたどりました。

ストックホルム水賞（Stockholm Water Prize）は、世界中からノミネートされた水に関する傑出した研究、教育、活動を認められた個人、研究機関、組織の中からストックホルム水財団（Stockholm Water Foundation）の審査を経て授与される、水の分野のノーベル賞とも称されるこの分野では世界的に権威ある賞です。毎年8月に開催される世界水週間の期間中に、ストックホルム市庁舎において国王カール・グスタフ16世から副賞の15万米ドルとともにクリスタル像が贈られます。これまで、オーストラリア、カナダ、デンマーク、英国、インド、イスラエル、日本、南アフリカ、スイス、アメリカ合衆国、ベネズエラ、ドイツから受賞者が出ています。日本からの受賞者は1994年の久保赳博士、2001年の浅野孝博士のお二人で、お二人とも北海道大学のご出身です。

久保赳博士は昭和19年に工学部土木工学科を卒業して、建設省（現国土交通省）に入省、高度成長期の日本の下水道整備に初代下水道部長として取り組み、全国の下水道を飛躍的に充実させました。建設省を退官後は日本下水道事業団、下水道協会、下水道総合研究所の理事長として、欧米ならびにアジア太平洋地域との技術交流、国際協力プログラムを積極的に推進し、途上国への技術支援や国際社会での水環境資源保護に尽力しました。

浅野孝博士は昭和34年に農学部を卒業した後渡米、カリフォルニア大学バークレイ校とミシガン大学でそれぞれ修士課程、博士課程を修了し、モンタナ州立大学、ワシントン州立大学、カリフォルニア



州水資源局水高度利用専門官、カリフォルニア大学デーヴィス校工学部教授を経て現在はカリフォルニア大学名誉教授です。国際連合等の諸機関、特に世界銀行、国際保健機構、食料・農業機構、国連環境計画などのコンサルタント、水再利用のアドバイザーとして活躍し、再利用を含む水資源問題、水環境問題の専門家として知られ、浅野博士のカリフォルニア州水再利用基準は

世界の排水再利用プロジェクトの規範となっています。また、平成９年～11年に本学工学部に設置された寄附講座「水環境工学国際（西原）講座」の客員教授として国際交流と情報発信に努められました。企画展示のもうひとつの柱「北海道大学水研究の系譜」では、北海道大学の水の研究の系譜を衛生工学の発祥をもとにたどりました。ウイリアム・ホイラーはクラーク博士に請われて外国人教師として札幌農学校に赴任、農学校で数学、土木工学の学科目を講じ、校務のかたわら時計台、二代目豊平橋、モデルバーン、手宮鉄道等の設計を行いました。ホイラーが発明した水道用濾過池の集水装置であるホイラー濾床は長く日本の浄水場でも使われ、現在も札幌市藻岩浄水場で使われています。バルトンは明治政府に招かれて来日、東京帝国大学土木工学科衛生工学講座の初代教授として衛生工学を講ずる一方で、日本各地の上下水道の調査、設計、工事に尽力しています。東京帝国大学土木工学科出身の倉塚良夫は旧満州では水源ダム建設、水道の近代化に尽くし、北海道大学工学部創設と同時に帰国、土木の水工学第一講座教授に就任して、海岸工学、港湾工学のほか衛生工学の授業を行いました。札幌では藻岩浄水場の技術指導を行い、また戦中戦後を通じて研究者、技術者の必読書とされた日本水道史に残る本格的技術書「浄水工学」をまとめるなど、日本



ストックホルム水賞のクリスタルグラス製トロフィーの前で握手する久保赳博士（左）と浅野孝博士（右）

の水道工学がお雇い外国人の手を離れて一人歩きを始めた頃の草分けのひとりで、後に連なる北海道大学の水道人の祖として多大な業績を残しています。

昭和26年の米国工業教育顧問団は衛生工学と化学工学を高等教育機関に充実させるように日本政府に勧告し、昭和31年北大創基80周年式典のため来道した清瀬一郎文部大臣が北大に衛生工学科の新設を認めると発表したことを受け、ようやく昭和32年に本学に衛生工学科が設置されました。これは日本で最初の衛生工学科で、衛生工学第一講座が後の上水工学講座、第二講座は後の下水工学講座、第三講座が後の水質工学講座となります。昭和36年には第一期生の卒業にあわせて大学院修士課程が、38年には博士課程が開設され、爾来、水環境工学・都市水工学の揺籃期から発展・成熟の過程に至るまでの半世紀にわたり、研究者はもとより、日本の環境科学・技術・行政・産業界に多くの人材を輩出してきました。

衛生工学は境界領域にある学問で、大学院には衛生工学科出身者はもとより、本学および他大学の関連学科の卒業生が含まれていました。久保博士も浅野博士も衛生工学科の出身ではありませんが、北海道大学の水の研究は、このお二人のような他大学、他分野の研究者や研究領域との交りがいわば支流のように衛生工学科という本流に流れ込み発展を続けてきました。その流れは今日もなお脈々と続いています。

渡辺義公
（工学研究科教授／環境工学）

第13回企画展示「北海道の歴史的建築図面展」

本展示は、総合博物館３階企画展示室で平成16年７月21日から９月５日まで開催しました。展示は前期と後期の二期に分け、８月９日に展示内容の大半を入れ替えました。展示のテーマと主な展示物は以下の通りです。

〈前期展示〉

◎　札幌に残る歴史的建築：時計台・豊平館など指定文化財のほか、有島武郎旧邸など北大に縁のある歴史的建築

◎　北海道大学の文化財建築：重要文化財指定の第二農場・植物園ならびに登録有形文化財の古河講堂など

〈後期展示〉

◎　北海道の文化財建造物：岡崎医院（士別市）、旧岡崎家能舞台（小樽市）など、北海道内の建築史研究者の出品協力による北海道内の文化財建築

◎　田上義也とマックス・ヒンデル：角幸博大学院工学研究科教授のコレクションを主体とした、建築家直筆の図面など

◎　北大営繕技術者たちの足跡：旧農学教室（1901年）、厚岸臨海実験所（1931年）、現農学部本館（1935年）など、北大の営繕課に所属した建築技師たちの作品

本展では建築図面の魅力が多くの人に伝わるよう、展示する図面は、何が描かれているのか理解しやすく、描写の美しいものを優先しました。さらに、その図面がどの建物のもので、どこが描かれているかを理解する助けとして、模型もあわせて展示しました。主として縮尺1/100の精細な模型は、故原田栄三氏、佐々木泰之氏の制作です。また本展に合わせ、農学部本館の計画案の1/40の模型を、展示計画に携わった大学院生らとともに制作しました。

期間中８月29日～31日の３日間は、日本建築学会大会と重なり、多くの建築関係者にご来場いただきました。北大が所蔵する建築図面の歴史的価値を高く評価


農学部本館の計画案模型

いただくとともに、図録の頒布・出版を所望されました。また、この３日間限定で日本に１枚しかないといわれるフランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテル１階平面図（設計原図）の展示も行なわれました。

本展で展示された建築図面ならびに関連資料のうち、本学関連のものは来年度以降常設展示として一般公開の予定です。

共催：（社）日本建築学会北海道支部歴史意匠専門委員会、（社）日本建築学会大会実行委員会

池上重康
（工学研究科助手／建築史）

第14回企画展示「恵迪寮資料展 ―恵迪魂の根源を追う―」

北海道大学総合博物館は、初代恵迪寮舎が現文系校舎位置に新築（1905年）されて数え100年になるのを契機に、第14回企画展示「恵迪寮資料展－恵迪魂の根源を追う－」を平成16年9月14日から10月17日まで3階展示室で開催しました。本資料展は、北18条西9丁目の恵迪寮（第2代）に集積されていた文化資料が、昭和58年の閉寮時に現恵迪寮（第3代）に移設できなかったため、寮OBで組織する「恵迪寮同窓会」が各所に寄託管理していたものを、20年ぶりに一堂に集めて公開したことに意義があります。

また、会場入口に、恵迪寮玄関両脇に立つ角帽・丸帽の制服姿のマネキンでシンボル展示を試みるなど、恵迪寮の歴史を雄弁に物語る資料を公開しました。なお、初めての試みに「都ぞ弥生歌碑の除幕式」の様子を伝えるテープを流して懐かしい雰囲気を再現しました。



展示風景

高井宗宏
（農学研究科元教授／農業機械学）

第15回緊急企画展示「台風18号の爪痕 ―北大札幌キャンパス―」

平成16年9月8日に北海道に上陸し、大きな被害をもたらした台風18号。北大札幌キャンパスでもエルムやポプラをはじめとする大木が次々と倒れました。この様子をおさめて、写真約100枚を緊急企画として1階「知の統合コーナー」で9月28日から10月31日までの予定で公開展示しました。

本展示は被害状況の生々しさが失せないうちに、ビジュアルな記録を提示することを目的としました。

なお、本展示は報道機関等でも大きく取り上げられ、好評でしたので期間を延長して開催されました。

藤田正一（館長／獣医学・毒性学）



緊急企画展示を熱心に見学する来館者

第9回国際シンポジウム「アジア大陸の成長と変形」 International Symposium on Growth and Deformation of Asian Continent

第8代客員教授ブスロフ博士を招聘したのを機に、平成16年7月14日に、第9回国際シンポジウム「アジア大陸の成長と変形」を開催しました。

ブスロフ博士、研究部の箕浦名知男、松枝大治、理学研究科の植田勇人の4名で企画し、国内外から、7題の講演がおこなわれました。

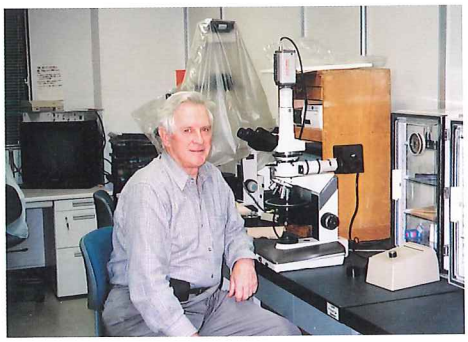
北大とロシア科学アカデミーシベリア支部地理学・地質学・鉱物学総合研究所との共同研究の成果や、ヒマラヤからバイカルに至る中央アジア大陸の構造地質学的研究などが報告され、活発な議論が展開されました。

シンポジウム担当：箕浦名知男
（研究部助教授／古生物学）

客員教授紹介

総合博物館では、平成16年8月14日より同年11月17日（約3ヶ月間）の間、第9代客員教授としてオーストラリアからDavid H. Green教授を招聘しました。滞在中は「上部マントルかんらん岩中のマグマチャネルの生成プロセス」を主要研究課題として、総合博物館及び本学関係研究者等との共同研究を展開しました。同氏は国際的にも極めて著名な実験岩石学者で、特にマントル実験岩石学の世界的権威でもあり、過去に関係する各種国際的学術賞を多数受賞しています。従って、これまで我が国訪問の機会は数知れず、日本の関係研究者との研究交流経験も深く大の親日家でもあります。タスマニア大学在任中には、オーストラリアの南極研究センターとしての役目を果たし、新たに金属鉱物資源科学分野の研究センター（CODES: Center for Ore Deposit Research）も立ち上げ、これらは現在まで発展を続けています。研究面では極めて真摯ではあるが、教育熱心で温和な人柄を兼ね備えた研究者でもあり、本国における研究者養成ではこれまで多数の国際的に著名な研究者の育成と輩出に貢献されました。今回の滞在中は、特に総合博物館資料部研究員の新井田清信助教授（大学院理学研究科）とのかんらん岩質マグマの成因解明に関する共同研究を展開すると共に、総合博物館の岩石標本の分類・整理指導等の博物館活動や理学研究科（地球惑星科学専攻）の学生教育にも関って頂きました。また同氏の滞在期間中には、関連研究分野である「上部マントルのマグマ成因論」に関する国際シンポジウム（公開セミナー）や道央の代表的なかんらん岩露頭地域（様似町）での現地見学会が開催され、国内外から多数の参加者がありました（次号に関連記事を掲載予定）。

氏名：David Headley Green（ディビッド・ヘドレイ・グリーン）
専門分野：実験岩石学



略歴：1936年2月29日オーストラリア、タスマニア生れ
タスマニア大学学部・修士課程修了、英国ケンブリッジ大学Ph. D.、タスマニア大学理学博士、同大学名誉文学博士
タスマニア大学地質学教室主任教授、オーストラリア国立大学副学長、同大学地球科学研究院院長 等を歴任。
現在はオーストラリア国立大学名誉教授・客員研究員

松枝大治
（研究部教授／鉱物学・鉱床学）

北緯43度、南緯43度
43° North, 43° South

タスマニア（Tasmania）は南半球にあるが、北海道と同じ経度（東経145°）、同じ緯度（43°）に位置する。両方の島では多くの共通点と相違点がある。一方は日本の都道府県の一つであり、もう一方は、オーストラリアの州の一つである。私はこれから両者の比較について書いてみることにする。

タスマニアは北海道とほぼ同サイズ（68,000 km²）で、南北及び東西延長がそれぞれおよそ300 kmである。しかしながら、その人口は50万人足らずで、北海道の約10分の1である。少なくともオーストラリアの大半が標高の低い山からなるのと比較して、タスマニア島は相対的に1,600 mを超える高山が多い。強い偏西風帯の通り道に位置するため、西部の山岳地帯や島の中央部では極めて湿度が高く年間降雨量が3 mに達するのに対して、東部では50—70 cm程度である。海の存在と南部に向かう広大な土地の欠落は、北海道に比べてタスマニアにより温暖な気候をもたらしている。山頂や中央平地での冬期の降雪は普通であるが、スキーを楽しむ機会は限られており、その時期を予測できない。特にホバート（Hobart）での降雪は稀である。

しかしながら、およそ2万年前の最終氷期には、タスマニアは典型的な陸地形やBass海峡の花崗岩からなる島々をつなぐ陸橋を露出させるような、海水準低下を生じた谷氷河を伴う万年氷原（ice cap）に閉ざされたことがある。多分5万年ほど前のこの頃に、オーストラリア本島から始めて人間がタスマニアにやって来たと考えられている。彼等は、シベリアで生活していた人々とほぼ同じ頃に氷河の末端付近で狩猟をしたり、海岸線で漁業をして生活していたと思われる。1万2千年前頃の海水準の上昇は、後に北部オーストラリアにやって来た国産の犬（オーストラリアディンゴ）を伴う人種からタスマニア人を孤立させた。タスマニアでのディンゴの不在は、最も代表的な有袋類動物、すなわち犬に良く似た風貌で、ディンゴ、狼あるいは狐と同様な生態的地位にあった“Thylacine”もしくは“タスマニアタイガー”の生存を可能にした。タスマニアやその先住民・野生生物の孤立は、ドイツ人探検家のAbel Tasmanによる1642年のヨーロッパ人の発見によって終焉を迎えた。さらに、1770年のCook、La Perouse、D'Entrecasteauxらによる訪問が、1803年における現在のホバートの地へのイギリス人の移民を導いた。

タスマニアにおけるヨーロッパ人の移住と北海道における日本人（倭人）の移住は、大雑把には19世紀のほぼ同時代に起こり、重要な類似性を示している。双方の類似性は罪人や兵隊および自由移民者の混在であり、政府から下付された土地での農業牧畜経済及び社会は、特にタスマニアの例では土着原住民社会に痛烈な衝撃を与えた。イギリスと似通った気候を持つタスマニアでは、移住民による本国からの植物、鳥、哺乳動物などの生物や建築様式の持ち込みにより、訪問者にこれが南半球と思わせるユーカリの森と青いユーカリで覆われた山々だけを除いては、場所によってはイギリスの田園風景をもたらした。タスマニアの魅力は、多くの保存がよい19世紀の石造り家屋と建造物であり、それらによってたやすく初期の村落から現代社会への転換と成長様式をみることができる。ホバートにあるタスマニア博物館と美術館、およびLaunestonにあるQueen Victoria博物館の両方には、特有の植物や動物のみならず、タスマニアの歴史と発展に関する素晴らしいコレクションと展示物がある。タスマニア大学は1890年にホバートに設立され、1970－1990年代にはその研究成果を世界的に認知させることができた。特にここでは、南極および南氷洋研究、地球科学（特に金属鉱床の研究）、および森林学（特に冷温帯森林を重視）の3分野の研究に力を注いでいる。第2都市のLaunestonにある大学の北部キャンパスには、現在タスマニア経済における重要性が増しつつある産業の魚貝類養殖研究センターがある。

タスマニアの広大な地域は国立公園に指定されており、島の南西部の3分の1は十分に装備した歩行者のみが接近できる山、河川、湖沼、森林、泥炭地などからなる野生の世界遺産となっている。この原野地域と州北西部や北部における富める農業地域の両者の対照性は、地質と気候が反映されたものであり、自然から管理された風景への転換の優れた挿絵（イラスト）をこしらえている。タスマニアの初期の歴史や移民は、羊毛と農業生産物に基づいており、これらは特定の生産物（例えば、重要な石油、モルヒネ、生産物、冷凍野菜など）と共に、特に輸出市場が成長し続けている。しかしながら、1871年のMt Bischoff錫鉱山の発見は、西部及び北東タスマニア両地域におけるその後の鉱床群の発見を導き、そしてこのことはタスマニアが世界的に最も多様で豊かな鉱物資源地域の一つである事を認識させる事になった。1885年に銅－金鉱山として発見されたMt Lyell鉱山は依然として今日も操業中であり、年間9,000万ドル相当の銅輸出に貢献しているが、その一方で付近には、1980年頃に最新の探査手法で発見されたHenry River Gold鉱山のような新しい金鉱山もある。



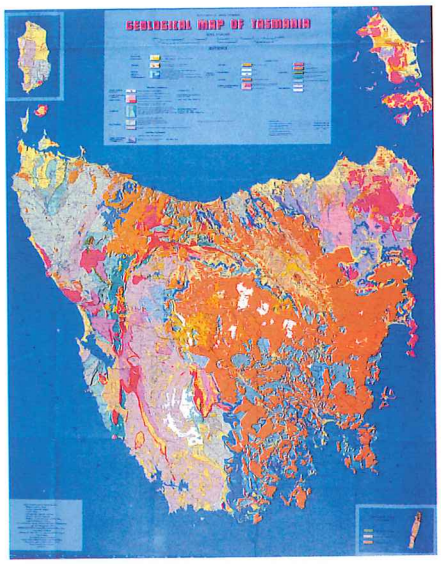
南西タスマニア山岳地帯における中央高原や、氷河が削ってできた谷間と湖の風景



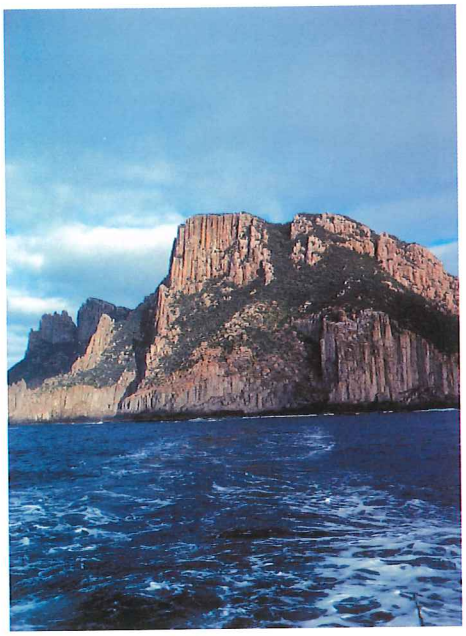
Crocoite（クロコアイト）
西部タスマニアのZheehan付近から発見された含鉛－クロム鉱物

1882年に発見されたZeehanの鉱山では主に銀、鉛、亜鉛が採掘され、1894年には化学、探鉱学、冶金学、分析化学などを教える鉱山専門学校も設立され、大繁栄した地域社会ができた。Zeehanの人口は1900年には10,000人を超え、タスマニア大学に併合されたこの鉱山専門学校は、1902年に新築の素晴らしいレンガ造りの建物に移転した。この建物は現在West Coast Pioneers' Memorial Museum(西海岸開拓記念博物館)として使用されており、ここでは1875年から今日までの西部タスマニアにおける特有の鉱業と鉱物処理の記録を所蔵している。鉱山専門学校設立初期には、タスマニアの各鉱山から傑出した鉱物標本コレクションが集められ、特産標本(特に、美麗な明るいオレンジカラーのcrocoite)が世界中の博物館や鉱床研究所との標本交換に供された。この標本コレクションは博物館に展示され、現在ではおよそ500人足らずの"Ghost Town"と化したZeehanが、西部タスマニア訪問者にとってお気に入りの場所となっている。

タスマニアの地質は南極の地質と酷似しており、North Victoria Landの南極横断山脈、特にペルム紀から三畳紀にかけての堆積岩中に併入するジュラ紀のドレライト(粗粒玄武岩)の厚い岩床(層状貫入岩体)は、深い海洋によって数千kmを隔てられているにもかかわらず酷似する。この事実こそが、特に南半球で活発な研究活動をしている地質学関連研究者達に、約3億年前に開始されたゴンドワナ超大陸分裂の可能性を含む大陸移動説に関する議論を巻き起こしたもととなっている。タスマニアにおける、1億8000万



タスマニア島地質図
中央および東部におけるオレンジ色はジュラ紀のドレライト岩床を示し、北西および北東タスマニアにおけるより薄いオレンジ色は第3紀玄武岩溶岩を表す
北東および西部タスマニアにおける赤色部はカンブリア紀およびデボン紀の花崗岩類を示す



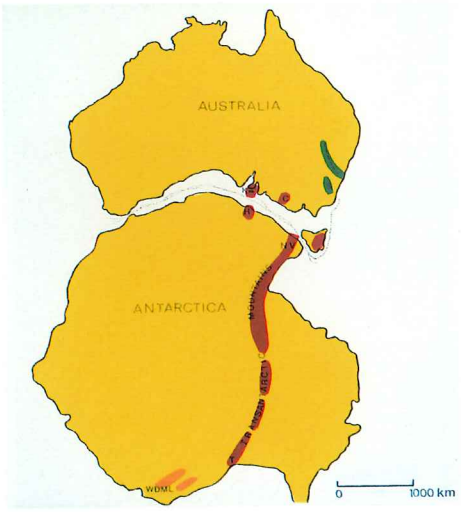
南東タスマニアのタスマン半島にみられるドレライトの崖
冷却した岩床の柱状節理は300mの高さの断崖を作る

年前の冷却に伴うドレライトに残された磁極方向の測定結果は、その当時はタスマニアがおよそ南緯80度に位置し、南極大陸と接合していた事を示している。南氷洋のオープニングはおよそ8000万年前に開始され、オーストラリア大陸が南極大陸から分裂し、ニュージランドがオーストラリア大陸から分離して行った時に生じた。この動きは隆起盆地を形成して、オーストラリア大陸からタスマニアをほぼ分離させ、Bass海峡とタスマニア全島に玄武岩質火山活動を伴った。より最近のタスマニアの地質は大陸の隆起分離の結果であり、そしてそれは活動的で収束型大陸縁の地質特性を持つ日本とはこのように大きく異なる。しかしながら、地質学的記録によれば約5億年前のカンブリア紀においてはタスマニアが活発な火山弧であり、沈み込み海溝を伴う最近の日本列島と極めて類似していた事を示している。これはタスマニアの主要鉱床の形成時期でもあり、日本の鉱床学的研究がタスマニアの鉱床の成因を理解をする上で有力な手がかりを与えるとともに、またその逆の場合もある。Rosebery、HellyerおよびQue River鉱床は"黒鉱型"鉱床と記載され、一方でMt Lyell鉱床は銅ー金斑岩(火山底)型鉱床と分類された。カンブリア紀の鉱化作用に引き続き、デボン紀の広範な花崗岩の貫入は錫、タングステン、モリブデン、金鉱化作用をもたらした。タスマニアの降雨と地形の両方が、結果として水力発電能力をもたらし、そして鉱物産業におけるそのエネルギーの必要性がこの鉱物資源開発の初期の発展を導いた。現在では風力発電も始まっているが、基本的にはタスマニア全島における電力は水力発電に基づいている。水力発電の利用はアルミニウムや亜鉛の両方の精錬に重要であり、それらは州の輸出額のうち3億3000万ドル以上も貢献している。

現在のタスマニアの日本とのつながりは数多くあり、タスマニアの輸出額のうち25.5%(5億9000万ドル)が日本向けのものである。これには9,000万ドルの甲殻類(ほとんどがロブスター)が含まれている。日本人はアワビの養殖がどのように定着し、また鮭や鱒の養殖が大成功したかを知っている。ある奇妙な偶然の出来事は、海藻(日本語の"ワカメ"、Undaria pinnatifida)のタスマニア水域への導入がもたらされたことである。多分、それは日本からの木端(コッパ)の輸送時に、輸送船のバラスト水中に偶然混入していたものであろう。これはその地域の海洋生物の消費によって大量に増殖したものであるが、この新しい事業は年間280トンに達する収穫高となり、"ガラクトフカン硫酸塩"と呼ばれる抗ウイルス化合物の抽出処理が行われている。この種類の普及が生じ、商業的かつ健康的な利益に転換して行くことが期待される。

ほぼ同じサイズ二つの島、北海道とタスマニアは全く異なる人口を有し、異なる半球にあるが、同経度、同緯度を有する両者間には多くの対照性があり、しかし歴史的には興味深い類似性を有している。科学的なつながりは両方の地域社会にとって有益であり、また商業および観光事業の交流にも繁栄をもたらすであろう。

David H. Green
(客員教授/04年8月14日-11月17日)
和訳:松枝大治
(研究部教授/鉱床学・鉱物学)



ゴンドワナ超大陸の一部をなすタスマニアと南極
赤色はジュラ紀のタスマニアドレライト地域、および岩石化学的に同一物である南極横断山脈の同時代のFerrarドレライトを示している

平成16年4月から平成16年9月までにおこなった各種セミナー

第62回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「北海道大学に通底する精神―萬象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ―」
山本玉樹（総合博物館・資料部研究員・北大元講師）
日時：4月10日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約80名）

第63回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「十年から百年スケールの気候変動」
身延庄士郎（理学研究科・助教授）
日時：4月24日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約70名）

第64回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「アイヌ語入門」
佐藤知己（文学研究科・助教授）
日時：5月8日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約60名）

第65回　北大総合博物館セミナー
「中国貴州・雲南省産中上部三畳紀海棲爬虫類研究の進展」
ハオ・ウェイチェンHao Wei-Cheng（地球空間科学院　北京大学地質博物館館長）
日時：5月19日（水曜日）14:00～15:30
（参加者約40名）

第66回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「大きいことはいいことか―サケ成熟オスの多型の進化」
前川光司（北方生物圏フィールド科学センター・教授）
日時：5月22日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約80名）

第67回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「むし歯（う蝕）を考える・一生自分の歯で食べるために」
谷　宏（歯学研究科・名誉教授）
日時：6月12日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約55名）

第68回　北大総合博物館セミナー
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究A（代表者前川　要／中央大学）新領域創生研究部門A01中世総合資料学研究系
「中世日本列島北部からサハリンにおける民族形成過程の解明―市場経済圏拡大の視点から―」
「極東民族形成史の試み―オホーツク文化の等質性を疑う」
天野哲也（総合博物館）
「古代―中世の要害遺跡形成史―増幌チャシ測量調査の成果から」　右代啓視（北海道開拓記念館）
「共生とエコシステムからみた中世アイヌの成立過程」
瀬川拓郎（旭川市立博物館）
日時：6月19日（土曜日）13:30～16:00
（参加者約40名）



第69回　北大総合博物館セミナー　「環境月間」関連行事
「北大キャンパスの植物・昆虫観察会（野外観察会）」
天野哲也・小野裕子（遺跡）、大原昌宏・澤田義弘（昆虫）、高橋英樹（植物）（全て総合博物館）
日時：6月20日（日曜日）13:30～15:00
（参加者約60名）

第70回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「『同位体』でさぐる分子の履歴」
角皆　潤（理学研究科・助教授）
日時：6月26日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約50名）

第71回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「ウイルスと戦う植物」
上田一郎（農学研究科・教授）
日時：7月10日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約45名）

第72回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「博物館標本と分類学―パラタクソノミストの必要性―」
大原昌宏（総合博物館・助教授）
日時：7月24日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約70名）

第73回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「ショウジョウバエは1年間に何回繁殖するか？」
戸田正憲（低温科学研究所・教授）
日時：8月14日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約40名）

第74回　北大総合博物館セミナー
21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「地層を読み解く―地球表層圏を記録するメディア―」
川村信人（理学研究科・助教授）
日時：8月21日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約70名）

第75回　北大総合博物館セミナー　土曜市民セミナー
「上昇するヒマラヤ山脈」
在田一則（理学研究科・教授）
日時：9月11日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約75名）

第76回　北大総合博物館セミナー
日本気象学会北海道支部後援
「さまざまな雪結晶The diverse of crystal」
ハレット・ジョンJohn Hallett（米国ネバダ州砂漠研究所・教授）
日時：9月18日（土曜日）13:30～15:00
（参加者約55名）

第77回　北大総合博物館セミナー
日本昆虫学会公開シンポジウム（日本昆虫学会主催、北海道大学21世紀COE「新・自然史科学創成」共催）
シンポジウム1「日本の昆虫相の成立史」、シンポジウム2（自然保護委員会企画シンポジウム）「レッドデータブック その役割と問題点」、シンポジウム3「交尾器の進化と多様性：分類学、形態学、行動学、進化学の接点」、第13回昆虫担当学芸員協議会総会「準自然分類学者（パラタクソノミスト）と博物館―ボランティア活動と生物分類学―」
日時：9月25日（土曜日）－26日（日曜日）

平成16年4月から平成16年9月までの主な出来事

4月　1日　第30回山口県少年少女の船一行見学（150名）
4月14日　三菱重工業（株）一行見学（3名）
4月29日　第2農場一般公開（11月3日まで）（延べ2,156名）
5月18日　第11回企画展示「新着コレクション展」（6月20日まで）
5月25日　第12回企画展示「ストックホルム水賞と北海道大学水研究の系譜」（7月4日まで）
6月　4日　札幌市立明園中学校生徒見学（161名）
6月　4日　北大ＯＢ理事会一行見学（80名）
6月22日　陳水扁台湾総統の夫人及び子息一行見学（16名）
7月21日　第13回企画展示「北海道の歴史的建築図面展」（9月5日まで）
7月23日　「カルチャーナイト2004」参加による博物館夜間開放（17:00～21:00）（延べ223名）
8月15日　第9代客員教授Ｄ．Ｈ．グリーン博士（実験岩石学）着任
8月25日　忠南大学副学長一行見学（9名）
9月　2日　滋賀県立虎姫高等学校生徒見学（291名）
9月　2日　函館東高等学校生徒見学（295名）
9月　2日　オーストラリア大使館参事官一行見学
9月　6日　博物館実習（9月14日まで）
9月　8日　金沢大学拡充整備促進協議会一行見学　（3名）
9月14日　第14回企画展示「恵迪寮資料展」（10月17日まで）
9月15日　フランス大使館一行見学（3名）
9月15日　ロシア科学アカデミーシベリア支部ウラジオストック考古学・歴史学・民族学研究所研究員Ｎ．クラディン、Ｙ．ニキーチン氏来館（9月16日まで）
9月16日　文部科学省科学技術・学術政策局村田総括官視察（1名）
9月16日　札幌旭丘高等学校職場体験学習（5名）
9月16日　サハリン州郷土博物館館長Ｔ．ローン氏来館
9月16日　ノルウェーオスロ大学博物館Ｔ．スヴェンソン博士(民族学)客員研究員（10月3日まで）
9月21日　中国・吉林大学長一行見学（3名）
9月22日　札幌東陵高等学校ウォーキングラリー（100名）
9月24日　宇宙航空研究開発機構間宮副理事長見学（1名）
9月28日　第15回緊急企画展示「台風18号の爪痕－北大札幌キャンパス－」（10月31日まで）

お知らせ

●第16回企画展示「人々の暮らしとオシラサマ信仰」が3階企画展示室で10月26日から11月14日まで開催されました。
●第17回企画展示「北大写真部日常展―身近な風景―」が3階企画展示室で11月23日から1月10日まで開催されました。
●第18回企画展示「北海道大学写真同好会 第4回写真展 2004年作品展」が3階企画展示室で1月25日から2月13日まで開催されています。どうぞご鑑賞下さい。

◆

お礼

以下のボランティアの方たちに、学術標本作製・展示解説・企画展示準備・ボランティア運営等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます（平成16年4月～9月）。

植物標本（市民）：今村ひろこ、小池武子、小渕修子、金上由紀、桂田泰恵、久志本アイ、黒田シズ、高橋美智子、高橋陽子、近久喜枝、矢島慶子、与那覇モト子。
植物標本（学生）：佐藤広行、村上麻季、井澤岳師、宮澤誠治、田畑倫子、加藤ゆき恵、持田誠、A. K. M. Golam Sarwar、小林孝人、Erni Susanti、星野フサ、武田千恵子。
昆虫標本：久万田敏夫、梅田邦子、石田孝英、問田高宏、大島一正、小林憲生。
古生物学：望月直、相原大介、中野系、蛭田明宏。
考古学：笠原明子、前田志乃、長屋恵、ロバート・クルツ。
鉱物学：鳥本准司、山崎敏晴、藤川修、永冨真紀子、甕聡子、橋本知世。
展示解説：清水良平、塚本精蔵、岡田美佐子、上田若菜、長谷睦。

●写真集『台風18号の爪痕』（写真・文　藤田正一館長）が発行されました。なお、同内容が『烈風一過―北大キャンパスの樹々』として北大図書刊行会から出版されています。
●藤田正一館長編集の『北海道大学に通底する精神と教育思想の歴史』（増補改訂版）が、本学15年度プロジェクト研究実施経費により9月に出版されました。





＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース　第10号
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
北海道大学総合博物館ニュース
編集：高橋英樹・松枝大治
発行日：2005年（平成17年）1月・発行者：藤田正一
発行所：北海道大学総合博物館
住所：060-0810　札幌市北区北10条西8丁目
電話：011-706-2658・FAX：011-706-4029
E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/
印刷：株式会社アイワード